

怪談 5 分間の恐怖

覚めな 怖 い 夢

中村まさみ



談怪

5分間の恐怖

中村まさみ

覚めな^{こわ}い怖い夢

約二十分という短い間に、12センチ砲以上が四四、八二五発、ロケット弾三三、〇〇〇発、迫撃砲弾二二、五〇〇発が撃ちこまれ、周辺は文字通り火の海と化した。それにより命を落とした住民の数は数千人に上る。そんな壮絶な戦場となったのが、まさにこの会場周辺だったのだ。

へいの上ですわっていた子どもたち……。

どんな思いで現代に生きるわたしたちを見ていたのだろうか。

大塚のノート

小学三年生のころ、クラスメートに大塚という男の子がいた。

大塚はとてもおとなしい子で、先生に指されて教科書を音読するときも、彼の方に耳をかたむけなければ聞こえないほど声が小さく、大変内向的な性格だった。

休み時間や放課後は、友だちと遊ぶこともなく、いつもぶつぶつとつぶやきながら、ひとりで教室で黙々とノートになにかを書きつづっている。

ある日、ふとそんな大塚の姿が目に入ったわたしは、いっしょにいた小沢にたずねた。

「大塚って、どうしていつもひとりぼっちでいるの？」

小沢は、一瞬、困ったような顔をしたが、なにかを思いついたのか、作り笑いをうかべながら答えた。

「大塚はほら、内気な子だからさ。きつとひとりでいるのが好きなんだよ」

そういうと、どこかへ走り去ってしまった。

釈然しやくぜんとしないまま、わたしが帰りじたくをしていると、そのようなすを遠くから見ている坂東ばんとうが近づいてきた。

「あんな中村、悪いこといわないから、大塚おつかには関わらない方がいいぞ。あいついつもノートになにか書いてるだろ？」

おれもまえにそれが気になって、いやがる大塚おつかから、むりやりむしり取って、なにを書いてあるのか見たことがあるんだ」

いま思えば、〴〵むりやりむしり取る〴〵というのもどうかと思うが、その当時は、坂東ばんとうのような、いわゆる〴〵ジャイアンタイプ〴〵が、どこにでも存在そんざいしていたのだ。

(どうせへたなマンガでも描かいてあるんだろう……)

そう思いながら、坂東ばんとうは大塚おつかからむしり取ったノートを、手荒てあらく開いたという。

「そこには二種類、文字が書かれていた。

ひとつは大塚おつかの書いたきつたねえ字、もうひとつは大人が書いたような、ものすごくきれいな字で、その二種類がまるで会話をしているみたいに、交互こうごに、しかもびっしりと書かれてい

たんだ。

たとえばな、『おはよう』という大塚おつかの字のあとに、『おはよう。今日も元気でがんばろうね』みたいな感じで、きれいな文字が続くんだけど、それはどう考えても、たったいまそこに書いたとしか思えないんだ」

「なんでそう思ったの？」

いやがる大塚おつかを無視むししたまま、坂東ばんとうはその先へ視線しせんを走らせた。

するとこんなことが書かれている。

〴〵さっきばんどうくんに、あたまをたたかれたよ〴〵

〴〵それはあなたがぼーっとして、先生から指されたことに気づかなかったからでしょう？〴〵

うしろにすわっている坂東ばんとうくんが、それを知らせようとして、軽くうしろから小づいだけ

よ

〴〵だけどあいつは、いつもぼくにいじわるするよ〴〵

〴〵あなたはいつもそうしていじけるのね。もっと自分から友だちに話しかけたり、いっしょに遊んだりしたらどうなの？〴〵

そこまで読んだ坂東は、とたんに気味が悪くなった。

自分が大塚の頭をこつんとやったのは、ついでしたが、六時間目のことであり、その後、帰りの会をすませてしまっていたるまで、大塚はずっと坂東の目のまえにすわっていたのだ。

ノートに書いてある、それらのやり取りを、すべて大塚ひとりで書いたとは、とうてい思えない。

だとすれば、女言葉のきれいな文字は、いつどこでだれが書きこんだというのか……。

「おまえとケンカになったことはあったけど、おれは決して、いじめっ子、なんかじゃない。

それはおまえも知ってるよな。

大塚のことだって、本当は、もっとみんなと遊べばいいのにつて、ずっと思ってるんだ。

そのノートのことだって、むりに見たのは悪いけど、それはみんなが気にしていたことだからな……」

結局そのあとも、わたしは大塚と親しくなることもなく、三年生の終業式の翌日、アメリカ

から返還された直後の沖繩へと引っこしてしまった。

時代は平成、令和と元号も変わり、二〇一九年、なんと四十六年ぶりに、わたしは坂東と再会をはたした。

おたがい身長も体形も変わってはいたが、そこは、ともにメンコ勝負に明け暮れた、竹馬の友である。長いブランクは、あつという間に消え去り、思い出話に満開の花が咲いたようだった。

「そういえばさ、大塚って覚えてるか？　なんか彼のノートの話、教えてくれたら？」

わたしはふと、大塚の不思議なノートのことを思い出してたずねた。

「ノート？　さあな、そんなこともあったっけ……」

そういつて初めはとぼけていたが、わたしが現在、怪談の仕事をしているというのと、坂東の表情が急にけわしくなった。

そしてわたしが単なる興味本位で聞いているのではないことを、なんども確認すると、声を低くして、こんな話を聞かせてくれた。

「おまえが沖繩へ行ったあと、四年でふたたび大塚と同じクラスになってな。

なんとか、やつをみんなの輪の中に入れようと、おれ、けっこうがんばったんだよ。

まあはたから見れば、おれが大塚をいじめているように映ったらしくて、クラス委員だった
檜田から、よく注意されたけどな。

なんでおれが大塚をそこまで気にしてたかというとな、三年のとき、おれたちの担任だった、
島田先生に教えられたんだよ、大塚の家庭の事情ってやつを……」

わたしが転校した直後、春休みに開放された校庭であそんでいた坂東を、島田先生が呼び止
めた。

坂東が大塚を気にかけていることに、島田先生は気づいていて、ジャイアントタイプとはいえ、
リーダーシップが取れる坂東になら、大塚の心を開くことができるかもしれないと考えたから
だった。

「島田先生の話聞いて、おれは本当にびっくりしたよ中村。」

大塚とは、三年生で初めてクラスがいつしよになったから、それ以前のことはなにも知らな
かったんだ。

大塚は二年生の冬に、交通事故で両親をいっぺんに亡くしてたんだよ。

あの年の冬休みに、父親の故郷である信州へ車でむかっていたとき、凍結した路面でスリッ
プしたトラックが、正面からつっこんだらしくてな。

後部座席に乗っていた大塚だけが無傷で、両親は大塚の目のまえで、息を引き取ったらしい。
そんな残酷なことってあるかよ。

その日以来、大塚は内向的になり、そこからはおまえも知ってる、あの大塚になっただけだ。
けだ。

そのまま持ち上がって、四年の担任も島田先生だった。

一学期が始まって少したったころ、保護者参観日があったんだが、そこであるさわぎが起
こった。

教室のうしろに母ちゃんたちがならび、日直が号令をかけて、みんなががたがたとすにす

わり始めたとき、突然、島田先生がポロポロと泣き出したんだよ」

かけていたメガネをはずし、ポケットから取り出したハンカチでなみだをぬぐっていたが、あふれるなみだは止まらず、そのうちオイオイと声を上げて号泣し出した。

それを見ておどろいたのは、子どもたちより、参観していた保護者の方だった。そのとき、たまたま参観のようすを見にきていた校長が、機転をきかして代わりに教壇に立ち、島田先生を保健室にむかわせた。

「みんなの動揺ぶりは大変なものだった。

そりゃそうだよな、目のまえで、しかも保護者参観の日に、担任の先生があんなことになるなんて、前代未聞だもんな。

結局その日、島田先生はみんなのまえには姿を見せず、その日は校長先生が最後までいてくれたが、島田先生がどうしたのかは、大丈夫というばかりで教えてくれなかった。

ところがな、その晩、島田先生がおれの家を訪ねてきたんだ。

そのとき、教室でなにが起きていたのかを、教えてくれた……。

教室のうしろには何人もお母さんたちが立っていたが、その中に、ひとりだけなんと、モノクロの人物を発見したそうだった。その人の顔を見たとき、なみだが止まらなくなったって……。

その色を持たない人こそが、大塚のお母さんだったんだよ。

先生の話聞きながら、お袋もポロポロと泣いてたよ。

おれは、翌日、先生が泣いた理由を説明するために、クラスのみんなにもそれを話して聞かせたんだ。

それからは、クラス全員で大塚のことを気にかけるようになってな。五年生になるころには、すっかり元気な大塚になってたよ。

もうあんなノートも書かなくなっただし、勉強も運動もよくがんばってた。

小学校最後の日、大塚はおれをいつもの神社に呼び出すと、突然握手を求めてきて、『あり

がとう坂東!』っていったんだ。

なんだか照れくさくなって、なんで突然握手だよって聞いたら、明日、九州に行くことになったって……。両親が亡くなってから大塚のめんどうを見ていた祖母もそこその年だから、博多にいる叔父の家に行くことになったって……。あ、やばい、なみだが……」

元はといえば、おせっかいな坂東の性格が生んだ男同士の友情だった。

しばらくして中学校の入学式が目前にせまってきた。

坂東は必要な文房具をそろえるため、文具店にむかった。

「いまとちがって飾り気のない、大学ノートってやつだよな、そういう中学で使う文具一式を買って、家に帰ってすぐ、おれはかっこつけてローマ字で名前なんか書いてやろうかななんて、新品のノートを机の上にならべたんだ。

表紙に書いて失敗してもなんなんで、裏表紙の内側に書くか……と思って裏表紙をめくったんだ。

それを開いた瞬間、おれは思わず声を殺して泣いたよ」

自分が今から名前を書こうとした、まさにその場所には、見覚えのある美しい文字で、心から感謝ですと書かれていたという。

怪談 5 分間の恐怖

怪談師 中村まさみ

不安奇異夜話

何度もおしよせる恐ろしくも不思議な世界へようこそ。

わたしが目の当たりにし、直接見聞きしてきた

怪しい話、不思議な話、悲しい話……

実際にあった怪異をお話ししましょう。



『人形の家』
[全33話収載]



『また、
いる……』
[全30話収載]



『病院裏の
葬り塚』
[全35話収載]



『集合写真』
[全35話収載]

中村まさみ

北海道岩見沢市生まれ。生まれてすぐに東京、沖縄へと移住後、母の体調不良により小学生の時に再び故郷・北海道に戻る。18歳の頃から数年間、ディスクでの職業DJを務め、その後20年近く車の専門誌でライターを務める。自ら体験した実話怪談を語るという分野の先駆的存在として、現在、怪談師・ファンキー中村の名前で活躍中。怪談ネットラジオ「不安奇異夜話」は異例のリスナー数を誇っていた。現在YouTubeにて「Ghost Contents」を配信中。全国各地で怪談を語る「不安奇異夜話」、怪談を通じて命の尊厳を伝える「道徳怪談」を鋭意開催している。

著書に『不明門の間』（竹書房）、オーディオブックCD「ひとり怪談」「幽霊譚」、監修作品に『背筋が凍った怖すぎる心霊体験』（双葉社）、映画原作に「呪いのドライブ しあわせになれない悲しい花」（いずれもファンキー中村名義）などがある。

- 校正 株式会社鷗来堂
- 装画 菊池杏子
- 装丁 株式会社グラフィオ

怪談 5 分間の恐怖 覚めない怖い夢

発行	初版 / 2020年3月
著	中村まさみ
発行所	株式会社金の星社 〒111-0056 東京都台東区小島1-4-3 TEL 03-3861-1861 (代表) FAX 03-3861-1507 振替 00100-0-64678 ホームページ https://www.kinnohoshi.co.jp
組版	株式会社鷗来堂
印刷・製本	図書印刷株式会社 252ページ 19.4cm NDC913 ISBN978-4-323-08130-4 乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社販売部宛にご送付ください。 送料小社負担でお取り替えいたします。 © Masami Nakamura 2020 Published by KIN-NO-HOSHI SHA, Tokyo Japan

JCOPY 出版者著作権管理機構 委託出版物

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088 FAX03-5244-5089 e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。
※ 本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。



『つきまとう本』

[全33話収録]



『見ては
いけない本』

[全35話収録]



『うしろを
歩く者』

[全35話収録]



『ひとり
増えてる…』

[全33話収録]



『12時05分15秒』

[全34話収録]



『立入禁止』

[全28話収録]

『乃木坂の怪談』

[全28話収録]



『マネキン人形』

[全25話収録]



『封印された本』

[全24話収録]



『たたられる本』

[全25話収録]

『霊を呼ぶ本』

[全23話収録]

